

(平成27年2月17日)

第10回 赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H27. 2. 17 (火) 18:30~20:30
場所 : 東京・文京シビックセンター 5F A会議室
出席者 : 13名

< 配布資料 >

- (資料1)「日本の近代化の礎を築いた洋学者 赤松小三郎」(レジメ) <佐藤智子さん作成>
(資料2)「新銃射放論」(赤松清次郎譯) 表紙写し <静岡県立中央図書館所蔵>

< 内容 >

1 佐藤智子さんによる「日本の近代化の礎を築いた洋学者 赤松小三郎」の発表

(佐藤智子さんプロフィール: 幕末・維新研究家。星亮一氏主宰「戊辰戦争研究会」のメンバー。共著「新選組を歩く」、「新島八重を歩く」、『「朝敵」と呼ばれようとも』ほか。佐藤さんが『「朝敵」と呼ばれようとも』で赤松小三郎を維新の殉国の志士の一人として担当(共著)したことがきっかけで、今回お住まいの静岡からお招きしての発表に至った。)

- 1) **和算について**～和算は当時から天文学や砲術(軍事)の基礎であり、赤松が和算に秀でていたことは彼の人生と切っても切れないポイント。赤松は内田弥太郎の私塾「マテマテカ塾」で蘭学、天文学、航海・測量などを学び、更に内田の紹介で幕臣下曾根金三郎の「下曾根塾」では西洋砲術を学ぶ。「下曾根塾」の他に当時の俊英たちの学び場の二大塾として、江川英龍(ひでたつ)の「葦山塾」の紹介があった。そこには大山巖や桂小五郎と並んで二人の上田藩士・加藤励次郎と中嶋半右衛門が学んだ。(二人とも非常に優秀であった)
- 2) **「新銃射放論」について**～安政四年、赤松(当時はまだ清次郎)が長崎海軍伝習所で翻訳したもの。ちなみに維新後に所蔵されていた函館の諸術調諸(しよじゅつしらべしよ)とは安政三年に函館奉行所の教育機関として幕府が設置した学問所で、江戸の「番所調所」(後の東京大学)と並び、前島密が学び、新島襄も学びにこようとしたほど」のさまざまな学問が実地で学べた。教授は五稜郭の設計に携わった武田斐三郎(あやさぶろう)。
- 3) **赤松小三郎書簡から判明したこと**～発表の中で、「赤松は私塾を開いていた頃、京の衣棚の何処に住んでいたのか?」について、佐藤さんから興味深い話があった。「烏丸衣棚」とは法衣商の西村吉兵衛が所有していた広大な一帯の土地で、特定はできないがその一部に家屋を借りていたのだろう。

- 4) イギリスと幕府 ～「維新史」の問題点として、日本に植民地化の危機はあったのか？ 佐藤さんは、イギリスに関しては特に日英修好通商条約締結（安政五年・1858年）後は日本を英国領化するというよりは通商目的で接しようとした、と紹介。

＜イギリスと赤松小三郎も、アプリン士官との関係、後の「英国歩兵錬法」翻訳など、切り離すことができない。また、佐藤さんからアプリンの他に、オールコック（初代駐日大使）、パークス（オールコックの後任）、アーネスト・サトウ（青年外交官）などが紹介されたが、彼らを詳細に調べることで、当時のイギリスの日本に対する見方が見えてくるのが改めてわかった。＞

（後日判明したこと）

「近代 佐久を開いた人たち」 中村勝美著 発行所 株式会社 櫟（いちい）

この本によりますと武田斐三郎は名前がでておりません。

南佐久郡臼田町にある竜岡城の五稜郭は慶応2年に完成。徳川一族の大給恒（おぎゅうゆずる）・・・松平乗謨（のりかた）三河国奥殿藩が元治元年から慶応2年にかけて完成させた。となっております。

以上

赤松小三郎研究会 事務局
萩原 貴（79期）